

## ■ 授業者より

- 生活科の学習指導要領には「大切な存在」という言葉が示されている。気付きの質を高めていく中で、対象と繰り返し関わっていくと、存在が大きくなり、その関係は自らの生活に生かされていく。アサガオであれば、始めはただのアサガオだが、学習を通して大切な存在になり、今後も「花を育てたい」「アサガオ以外も育ててみたい」などと、学んだことを実生活に生かそうとする児童の姿を目指す。
- 本単元では、全体研究における「自ら学習を調整する子供」の特徴3である「自己の学習活動や進め方、時間配分などを調整、決定するための手立て」に迫った。
- 生活科において、**試行錯誤を繰り返す活動を設定すること**は、自ら学習を調整する子供の特徴3に近づけることができると考えた。また、理科や社会などの見方・考え方にもつながっていく。
- 本単元における手立てを、より一層効果的にするために、行為主体性に着目した。具体的には、以下のような自己決定の場面を設定している。①種の種類や個数の選択 ②鉢の選択 ③育てる場所の選択 ④間引きの選択（本時） ⑤咲いたアサガオでしたい活動の選択 ⑥枯れていく花をどうするかを選択
- 本時の児童の様子は、緊張からか、あるいは間引きはリアルな問題だったからか、活発な意見交流とはならなかった。一方で、今までの気づきと関連させた試行錯誤はかなりしていた。この試行錯誤を通して気づいたことや決定したことが、見通しをもてる子供につながっていくと考えた。

## ■ 指導助言

### 旭川市教育委員会教育指導課主査

近田 博信 様

#### ○全体にかかわって

- 資質能力の育成のために、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が求められている。その中で資質能力を育成することは忘れてはならない。資質能力に関しては、指導要領に書いてあるのでしっかり押さえたい。
  - 最近では、「学びをゆだねる」という言葉が出てきている。小原先生の実践にも表れていた。参観者からは今日のような手立てを「全部やらなきゃならないんですか？」と聞かれることがある。いきなり全部行うことは難しいので、きちんと段階を踏んでいながら進めていくということが大切。
- 「各学校の実態」
- 43.1% 幼児の特性や発達を理解する機会を設定した小学校の割合
  - 21.6% それらを教育課程に生かしている

#### ○授業について

- 1年生6月にこれだけのことができるのは感動しかない
- 幼児期の教育を通して育まれた資質能力を踏まえて、身近な出来事の「気付き」から中学年以降の学習の素地を形成し、すべての教科と生活科との関連を迫った指導が大切。小原先生は環境設定を重視し、子供が自然と学んでいく環境を工夫して作っていた。
- 対象と関わる活動で熱中し没頭したことや発見したことは表現への意欲につながる。その中には失敗した経験も含まれている。教師の支援があれば、こういった気付きの質を高める活動が可能である。
- 表現→生み出した気付きを自覚することにつながる。
- まずは、児童の思いや願いを実現する体験活動を充実させること。そして表現活動と体験活動を繰り返していくことで気付きの質を高めていく。
- フィードバックとしてのコメントの質が秀逸であった。児童は、「これでいいんだ」と思えるので意欲につながる。
- 間引きについて話したいという児童がいた。そのとき、しっかりと聞こうという子供たちの姿があった。聞いてもらえなければ対話は成立しないので学級経営から聞くことの大切さを指導することが重要である。
- 試行錯誤し、自己調整や自己選択をした結果、変わらないということも変容の一つである。
- 単元構成が秀逸であり、全体を通して資質能力を育む見通しができている。
- ロイロノートに入れない子を助ける子がいた。この関係性が学級経営としてとても大切なので、価値づけたい。

## ■ 研究協議（主なものを抜粋）

**質問：選択の繰り返しをしてきたことで思いは変わったか？**

⇒対象への思いは確実に強くなっている。全部自分で決めることによって大切なアサガオになっている。そして、「今後どうする？」では、大事に育ててきたからリースや色にあえてつながらないのではと感じている。

**感想：自分の時は先生方が全部決めたので、子どもたちは先生になにやっただけ？と聞くようになってしまった。**

**質問：活動が多かったように感じる。アンケートを2回やった意図は？**

⇒もうすこしスムーズに流れると思っていた。思考の変容を見取るため。アンケートに答えれば、だれがどういう判断をしたか、学習をどう調整しているのを見取ることができる。ワークシートを見ると、最初と変わっている子が多かったので調整と変容が見られた。

**質問：間引きについての掲示はいつから貼っていた？**

⇒最初から貼っていた。環境構成は発問と同レベルで重要。  
最初は掲示に誰も食いつかなかったが、貼っている位置を下げて目線の高さにすると子どもが食いついた。蛍光ペンも引いて気付きやすいようにしていた。本を読むことは大切だという気付きにつながる。

**質問：情意的な側面を引き出す問い返しが多かったが、それはなぜか？**

⇒情意的な側面に迫れるのは1年生という発達段階だから。2年生では「アサガオさん」と言っても考えるのは難しい。命なので、真剣に向き合ってほしかった。

**質問：記録はすべてICTなのか？**

⇒タブレットとスケッチブックを使っている。ICTだけだと弱いのでスケッチブックを一人一冊配っていつでもかけるようにしている。自由帳のように思いも残せる。

**質問：思考と表現は一体。もうすこし表現場面が多くてもよかったのでは？**

⇒普段はもっと話す児童が多いので、表現しながら思考できると考えていた。ただ、話すと見取ることが難しく、書かせると表現できないという課題がある。

**質問：作業にならないようにするには？**

⇒アサガオを育てる活動は作業になりがちだが、迫り方でしっかりと対象と関わることができる。そして、つぎのどう育てるかにつながる。追ってしまった児童は、つぎはやさしくさわるという気付きと行動の変容につながっていた。